

受験体験記に寄せて

エデュコ代表 湯田伸一

エデュコ二十二期生の皆さん、ご家族の皆さん、それぞれの思いを持って臨んだ受験活動の成功を、心より祝福いたします。

二十二期生の受験活動を一言で言えば、「とても幼い集団のように感じられたものの、最終局面では覚醒したかのように、志望校の過去問に積極的に取り組み、結果、一人ひとりの子どもたちが最大効果を示した」といえるでしょう。

さらに、前年にもまして、子ども・保護者・エデュコスタッフの共通理解が強かったといっています。

幼かった様子の具体的な例をあげれば、授業中に奇声を発して講師や塾友の関心を引こうとしたり、塾友間の水平的関係においても、少しの行き違いにもかかわらず自己主張を延々と続けたりする子どもが少なくありませんでした。

また、ノート学習の未熟さも目立ちました。エデュコが提案するノート学習の意義は、「確かな理解と解法にこだわり、『向こう傷を恐れない戦うノート』を作成し、常に自分の実力向上を図る」ことなのですが、私の目には、「ほめてもらいたいマルの多いノート」が多く映りました。

授業前に子どもたちのノートを点検する目的は、「それぞれの不完全な部分＝課題」の確認なのですが、その思いが通じるのに時間がかかったともいえます。

とはいえ、過去問演習が開始される六年生後期からは、見違えるように変貌を遂げていきました。ほとんどの子どもたちが、毎週、着実に過去問演習記録を提出し、徹底して課題と向き合う姿勢が確認されました。

さらに、すごかったのが一月校（主に埼玉校）受験の経験を自身の受験戦略に取り込み、二月校（東京校）受験にむけ、凄みをもって臨めたことです。改めて、一月校受験による経験の重要性を認識することとなりました。

そして、二月の東京校受験に突入してからは、「合格・不合格を恐れず、これまで頑張った自分を大切にす目的で、納得の答案が書けるか確認しよう」という、三位一体の理解を擁して、堂々とした受験活動ができたといえます。

その様子を子どもたちの体験記から探してみれば、「何も悔いが残らずやりきった気がした」「最高の受験ができたと思う」「納得できる終わり方にできてよかった」「満足のいく答案が作れたのでやりきれた」「満足な結果になった」「がんばることを学んだ」「がんばって良かった」「合格！！まさかの結果に泣きまくり」「あきらめないでよかった」「受験活動をやってきた事で成長できたと思う」など、まさに異口同音の自己省察がずらりと並びました。

一方、保護者の体験記からは、「息子は一回りも、二回りも大きくなった」「まだまだ幼いと思っていた娘が、大事な正念場で発揮した底力」「最後まであきらめずに努力し続けた息子を誇りに思う」「本人が納得しているのであれば、これ以上、親は何もいうことはありません」「息子が『いままでありがとう』と書いて記念品をくれた。中学受験をやってきてよかった」など、入学試験の合格・不合格の次元を超えて、愛しいわが子の人格的成長を喜ぶ保護者の気持ちが満ち溢れています。

私たちエデュコスタッフが考える中学受験の意義は、「頑張る経験を通して、すべての子どもたちが自尊感情(自信)を高めながら成長する」ことです。

この点に照らして、二十二期生の頑張りど、頑張りによって得られた自尊感情が確認されることは、大きな喜びであり、二十二期生の子どもたちに感謝申し上げます。

もう一つ、例年になく特筆できることがあります。エデュコでは、ご承知のとおり駅看板を毎年卒業するエデュコ生の写真で飾りますが、今年に参加(参加はまったくの任意で、厳格に保護者の「承諾書」が求められます)率が、群を抜いて高いことです。

志木駅前本部校・ときわ台駅前校併せて七十二名が参加しました(要町駅前校では、駅看板を確保できていません)。参加できなかった人も、合唱団の発表会と重なったり、合格祝い旅行と重なったりしたものです。

一般に看板は、商業広告そのものといっいでしょう。ただ、私たちがその看板に実在するエデュコ生たちを登場させたい理由は、少々大げさかもしれませんが、子どもたちに「気高く、誇りを持って、堂々と生きてほしい」からです。

頑張ることをすれば、自信がつき自尊心が持てます。エデュコでの学習経験に自信を持ち、達成感と自尊感情に満ちていると思われる顔が、ずらりと並びました。

最後に、例年申し上げることですが、二十二期生の皆さん、エデュコで培った「手を使う学習」「ノートで考える学習」は、中学・高校での学習の王道を行く方法と自負するものです。

学習の型を維持して、揺るぎない確かな理解にこだわり、自分を磨き上げて行ってください。

平成二十七年 三月吉日